

「日々の理科」(第 3151 号) 2023, -3, 23

## 「最後の春みつけ (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

3月に入って、大学構内にも急に春が来た。「春が来た」と感じるのは、風景、風の暖かさ、花の香り、野鳥の声などに代表される。私はシジュウカラのさえずりや、ジンチョウゲの香りで春を感じることが多い。



小学校の校庭から見ても、誰が見ても春とわかる風景である。サクラの樹に挟まれた背の高い樹はケヤキである。このケヤキも、周囲に邪魔する樹木や人工物がなくて、ケヤキ本来の理想的な樹容(自形)を呈している。写真ではよくわからないが、ケヤキもたくさんの若葉を芽吹かせている。



以前は大学の学生会館の中庭に「イタドリ広場」という自然観察の好スポットがあった。現在は学生寮が建って、自然観察はできなくなった。しかし、大学グラウンド(北グラウンド)の端にあった温室跡の土地が良い自然観察スポットとして活用されている。



今の時期は丈の低い草が茂っているが、初夏になると「イタドリ」が繁茂する。「新イタドリ広場」と呼ばれている。面積は狭いがちょっとした疎林もあって、特に1年生には、実にすばらしい環境だと思う。



シヨカッサイ(ムラサキナバナ)が満開だった。数が多いので「花束」を作るのには最適だ。ハナダイコンと混同されることが多いが、別の種類だ。



新イタドリ広場の端には、ニリンソウの群落がある。武蔵野台地本来の山野草の一つだ。まだ咲いている花はなく、この2個のつぼみをやっと見つけた。4月に入って咲く姿が楽しみである。